

滑川市早月加積地区／清流の里めぐり 2014年8月18日

6. 婦人消防隊



■ 防火に尽くし30年

紺色の制服に身を包んだ女性がずらり。7月中旬の夜、滑川市笠木の公民館。地元の女性でつくる「笠木婦人消防隊」に集ってもらった。

婦人消防隊と言うと何やらいかめしいが、火災の予防に取り組む女性だけの民間組織。市内唯一の存在で、前身を含め30年以上の歴史がある。

「火事現場で活動することはないけど、結構、いろんな取り組みをしているんです」

隊長の尾川ひろみさん（55）が説明する。隊員は30～70代の主婦や会社員ら2

4人。消防署の各種行事に参加し、春と秋はショッピングセンターで市民に防火パンフレットを配る。また、隊が所有する消防ポンプを定期的に点検。エンジンがかかるか、台車のタイヤの空気が十分かなどをチェックしている。

ポンプ点検とともに欠かさないのが、町内の夜回り。毎月15日、3人一組で拍子木や鐘を手に1時間ほど歩く。

「暑くても寒くても、どんな日でも。吹雪の夜なんか、こんな日に家の中まで音が聞こえとるかなあ、と思うこともあるけどねえ」

別のベテラン隊員たちが笑い話のように言う。

前身の笠木婦人防火クラブができたのは1981（昭和56）年。笠木少年消防クラブが結成された際、母親たちが「私たちも防火に協力を」と立ち上がった。現在の名称に変更した93（平成5）年、全国婦人消防操法大会に県代表として出場した。

市内では他にも三つの婦人消防隊があったが、近年、高齢化などを理由に解散した。笠木の場合も無縁ではない。かつて40人以上いたという隊員は年々減っている。隊員集めは頭の痛い問題だ。

「先のことを考えれば不安だけど、まとまりがあって意識の高い組織。何とか続いてほしいと思うんです」

同席した地元の石倉俊明さん（67）が話す。元市消防長で、前身の結成に携わった。東日本大震災以降、地域に根差した防災組織の重要性は増している、と強調する。

この夏、市の予算が付き、老朽化したポンプが無事に更新されることになった。3代目のポンプになる。

■遠望近信 大和修二さん（62）横浜市、鉄建建設常務執行役員

古里を離れ44年の歳月が過ぎました。高校時代、初めてのデート場所に選んだのが早月川。淡い思い出としていまだに心に残っています。早月と言えば、登山ブームもあって早月川や早月尾根が有名です。劔岳登山に挑戦する機会があれば、ぜひ尾根に登ってみたいと思っています。

同窓会や仕事の関係で年に1回は帰省しています。来年は北陸新幹線の開業で利便性が一気に高まります。立山連峰と日本海の素晴らしい景色を併せ持つ古里を、これからはもっと気軽に訪れたいと思います。（笠木出身）